

CLC 交換留学報告書

氏名	貞野紀伊
学部/研究科・学年（留学時）	法文学部人文社会学科・4年
留学国名	アメリカ
留学期間	3ヶ月
実施年月	9月20日～12月14日

1. はじめに

私は、アメリカ合衆国イリノイ州にあるカレッジオブレイク・カウンティ（CLC）に約3か月間留学しました。本報告書では、留学を通して学んだことや気づきについて報告いたします。



（CLC 内の自習スペースとショップ内の様子）

2. 留学をしようと思った理由

私が留学をしようと思った理由は、2つあります。1つ目は、今まで学び続けてきた英語の実践的な力を身につけたいと思ったからです。高校一年生の頃に、約2週間アメリカへの語学研修に参加し、実りある経験をしたと同時に自分の思ったこと・感じたことを英語でうまく伝えられないもどかしさを痛感しました。そのため、実際に現地に赴いて、英語で人と会話をし、生活するという環境下に自分を置いてみたいと考えようになりました。2つ目は、異なる文化背景をもつ人々との交流を通して自身の視野・価値観を広げたいと考えたためです。近年では街中でも外国人を見かけることも多くなりましたが、多くの日本人にとってはまだまだ異文化というものが疎遠な生活環境にあると

思います。この先社会に出て、今まで以上に多くの人と関わったり、外国の方々と共に仕事に取り組んだりする機会が当たり前になってくると考えたとき、様々な背景を持つ人々のことも受け入れることができる人間性を養うことが重要であると考えました。そのため、留学をすることによって、多くの人々と交流し、彼らの文化やそれに伴う考え方や価値観などを知ることができると考え、留学を決意しました。

3. その大学を選んだ理由

CLC を留学先を選んだのは、CLC の環境が自分の留学を最大限に実りあるものだと感じたからです。CLC が位置するイリノイ州は、多様な異文化背景を持つ人々が多く存在しており、「アメリカの縮図」とも言われています。また、以前 CLC に交換留学生として派遣された友人から、CLC では留学生に向けたイベントが活発に行われているということを教えてもらいました。これらのことを踏まえて、CLC での留学が、英語を学びながら多くの人々と関わり、自分の視野・価値観を広げるという自分の目標達成を後押ししてくれると確信し、CLC を交換留学先として選択しました。

4. 留学先で学んだこと（授業の様子）

学校では、対面授業と同期型でのオンライン授業の2つの英語の授業を受講しました。対面授業は週3回、オンライン授業は週1回というスケジュールです。

週3回の対面授業は、スピーキング力とリスニング力の向上に重きを置いた授業1回とリーディング力とライティング力の向上に重きを置いた授業2回という構成で、受講者は8名と小規模な授業でした。そのため、最終プレゼンテーションに向けたテーマ決めのアドバイスやレポートの内容・文章の添削など、先生が生徒一人ひとりの学習をサポートする時間が設けられており、手厚い環境の中で学習することができました。週1回の同期型オンライン授業では、スピーキング力の向上に重きを置いた授業でした。オンラインだからこそという部分もあり、受講者同士でのやり取りの機会を意図的に多く設けていたように感じます。受講を決めた当初は、「同期型と言えど、オンラインでの授業だと先生の話聞くだけにならないかな」と不安に思うことがありましたが、その不安もすぐに消えるほど対面の授業と同じような感覚で授業に取り組むことができました。

2つの授業を通して共通して感じたことは、学生が発言することに対してためらいがないということです。先生から尋ねられたことだけでなく、疑問点や内容に対する自分の意見を伝えることが当たり前であり、生徒の主体性・授業の自由度・先生との関係性が日本の教育環境とは全く違っていると驚かされました。最初は、周りと比較してしまい、何もできない自分に無力さを感じていましたが、授業になれて以降は、自分は自分だと割り切りつつ発言にも挑戦するという前向きな姿勢で授業に取り組むことができました。



(女子クラスメイトとの写真)

5. 現地での生活（住まいや食事）

現地では、ご夫婦と1人の息子さんの3人暮らしの家に3か月間ホームステイをしました。私の部屋は地下にあり、かなり広いスペースだったため、不自由なく快適に生活することができました。授業は午前10時スタートでしたが、マザーの通勤の流れで学校まで送ってくれるという形だったため、7時半頃には学校に到着しており、授業の時間まで自習するという学校生活を送っていました。



(ホームステイ先での自分の部屋と10月頃の近隣の光景)



(外食先でのホストファミリーとの写真)

食事に関して、ホストファミリーはフィリピン出身の方だったので、家での食事は主にフィリピン料理が多かったです。夕飯は午後4時半～5時頃から食べ始めるという生活の流れでした。



(食べていた夜ご飯の一例)

6. 留学先で楽しかったこと、辛かったこと

留学先で楽しかったことは、友人との交流です。昨年5月に CLC とジョリエット・ジュニア・カレッジ (JJC) の学生が愛媛大学に短期研修に来ており、その交流イベントに参加した際に友達になった CLC の学生と連絡を取り合い、現地でも交流することができました。ハロウィンの時期には、地元の人たちでにぎわっているハロウィンフェスティバルに行き、ジャック・オー・ランタンを作ったり屋台での食事を楽しんだりしました。また、放課後にショッピングモールに行き、お土産を一緒に選んでもらったり、夕飯はアメリカで人気のステーキチェーン店でステーキを食べたりするなど、楽しい時間を友人と過ごすことができました。



(友人と一緒に作ったジャック・オー・ランタンと友人との写真)

また、CLCの留学生をサポートしたりイベントを企画したりする Department of Global Engagement (DGE) という部署を通して出会った友人たちとの交流も大切な思い出です。DGE が企画するキャンドル作りの課外活動やシカゴのダウンタウンにある博物館に行くイベントなどに積極的に参加しました。主に F1 の学生が参加しており、出身国がメキシコやマレーシアなど、様々な国出身の学生と出会うことができました。



(キャンドル作り体験での一枚とフィールド博物館を背景に撮った写真)

加えて、対面授業のクラスメイト 1 人と特に仲良くなり、彼女と共に過ごした時間もかけがえのないものとなりました。授業間での休憩時間に一緒にお弁当を食べながらくだらない話をする日々や、シカゴのダウンタウンでのお出かけなど、日常的事から観光まで充実したのは彼女と出会うことができたからだと思います。また、彼女は非常に英語が上手であったため、会話の中で分からないことがあったらすぐに聞いたり、私が英語でうまく表現できていないときには言い直してくれたり、彼女から英語を学ぶ機会が非常に多かったです。



(スカイデックタワーで怖がりながら撮った写真と夕方のダウンタウンの様子)



(ミレニアム・パークにある The Bean を背景に撮った一枚)

楽しいことがあった半面、辛いこともありました。特に、DGEでの活動に参加している際に、学生同士が英語ではなく彼らの母語で会話をしていたときです。英語で話しているときは何について話しているのか理解できるため、話についていくことができたのですが、彼らの母語で話しているときはもちろん全く理解することができずに、疎外感を感じることも多々ありました。当時の私は「これも異文化理解の一つだな」と割り切ることで精一杯でした。今考えれば、「なに話しているの～？」と気軽に聞けばよかったです。

7. 終わりに

留学を振り返って、CLCでの1学期を通して「英語力の向上」と「自分の視野・価値観を広げる」という留学の目標を達成できたと思います。「英語力の向上」に関して、最初は伝えたいことをうまく伝えられないもどかしさを感じることも多々ありましたが、授業で習った単語を日常生活の会話で実際に使ってみたり、相手が使っていた表現を真似したりと、ホストファミリーや友人とのコミュニケーションの中で単語・文法など表現方法を広げることができました。「視野・価値観を広げる」という目標に関しては、様々な国出身の学生と交流し、彼らの生活スタイルや学業に対する考え方、ノリ、コミュニケーションへの積極性など、日本との違いを肌で感じました。日本でしか生きてこなかった私にとって、3カ月という長いようで短い期間の中で、人々の多様性・生活の多様性・人間関係の多様性など、今後の自身の人生において活かすことのできる新たな視野・価値観を得ることができました。

最後に、今回の留学は当時のアメリカの学生ビザ発給停止の政策によって予定より約1カ月の遅れを取ってのスタートでした。先の見えない不安な日々が長く続きましたが、多くの方々が支えてくださったおかげで無事に交換留学をやり切ることができました。この交換留学を支援してくださった愛媛大学及び愛媛大学国際連携課学生交流チームの皆様、CLC教職員の方々、そして家族・友人に心より感謝申し上げます。この交換留学の経験を今後の人生に活かすとともに、さらに勉学に励みたいと思います。